

■（157）取材で相手のうそを確実に見抜けるか

「全聾（ろう）の作曲家」の作品は、実は18年間にわたって大学の非常勤講師がゴーストライターとして作っていたことが判明した。作曲家のうそを見抜けずに間違った情報を伝えたとして、新聞は「おわび」を掲載し、記事をデータベースから削除した。

取材でうそをつかれたら……。再び裁判が注目されているオウム真理教事件を思い出した。同教団は19年前の春、地下鉄サリン事件を起こした。その前後、猛毒のガスや菌をまく装置が駅に置かれ、殺人や放火など事件が続いた。新聞社には「犯人を見た」とのたれ込み（情報提供）も寄せられた。話を聞くと興味深い。でも、最後に現金や食事を要求されたことから、うそと判断した。

記者は「情報」を買わない。売買される話は、少なくとも脚色される恐れが強いからだ。怪しい情報は「証言や資料で裏をとる」が原則だ。ただ、作曲家のように、社会的に信用できると思いついた相手ならどうか……。確実に見抜く自信はない。

うそは、つく側もつらい。作曲家も、想像以上に評価が高まり、引くに引けなくなったのかもしれない。心境をいつか正直に話して欲しい。報道も伝える責務があると思う。(山)